福音　№.301　2013年6月

「わたしは主、あなたの神」小さな聖書集会

わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。
あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。（出エジプト記 20:2～3）

聖書には旧約聖書と新約聖書がある。二つで一冊の聖書となっているが、それを一本の木にたとえると、旧約が根っこの部分で、新約が幹、枝、青々と繁る葉っぱなど地上に出ている部分。一人の人にたとえると、ヘソから下とヘソから上。どちらにしても、旧約と新約、一つだけではいけない、二つ合わせてキリスト教の聖書なのだと教えられた。聖書を読む前は、そんなものかとぼんやり思っていたけれど、少しずつ学んできて、確かに旧約と新約は一つ聖書であって、そのどちらも無くてならぬ神の言葉なのだと、日々感動するようになった。

そして、「あなたには、わたしをおいて他に神があってはならない」という、この十戒の第一の戒めこそ、旧約も新約も貫いて、神が神であり、人は人であるという、すべての基となる御言葉なのだと今、強く思う。

新約聖書では、イエス様が「わたしを見た者は、父(神)を見たのだ」「わたしと父とは一つである」と言われているように、神様はイエス様によって御自身を現された。このイエス様こそが、神を知らないままにこの世の奴隷となっていた私たちを、神の国へと導き出してくださるのだ。イエス様の十字架の死によって罪赦され、この世から導き出された者は「わたしは主、あなたの神」という慕わしい御声に絶えず耳を傾ける。そして、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」という戒めに込められた、量り知ることのできない神様の愛に打ち震えるのである。

☆聖書を読むこと、祈ること、主イエスと共に歩むこと☆　小さな聖書集会

昨日は、3人で「士師記」15章と、「ヨハネの黙示録」1章を読んだ。4人で読む予定だったが、一人は体調不良でお休み。2人でも、3人でも、ともかく読み続ける。

用意してくださったテーブルにつき、窓の外を見ながら、きゅうりが伸びてきたねえ、あれはゴー

ヤ？と二言三言、言葉を交わしていると「ホーホケキョ」とウグイスの声。緑の光に包まれて、ウグイスも共にまず賛美を。

次に、聖書輪読。聖書の深い内容が分かろうが分かるまいが、少しでも分かりたいと切なる願いをもって集まるとき、私にはひとつの確信がある。イエス様を求めて、他の何でもなく「イエス様ご自身」を求めて集まって空手で帰されることは決してないということ。

「神様、今日は本当に美しい日です。さわやかな風、いっぱいの緑もありがとうございます。でも、私の心は今日の日のようには、晴れやかではありません。そのことはあなたがご存じです。でも、あなたはこうして聖書を読むために、３人集めてくださいました。聖書から、今日も大切なことを教えてくださると思います。ありがとうございます」と、姉妹のひたむきな祈りに胸打たれつつ、「主よ、お教えください」と心で祈りを合わせる。

士師記１５章１４～１５節

サムソンがレヒに着くと、ペリシテ人は歓声をあげて彼を迎えた。そのとき、主の霊が激しく彼に降り、腕を縛っていた縄は、火がついて燃える亜麻の糸のようになり、縄目は解けて彼の手から落ちた。彼は、真新しいろばのあご骨を見つけ、手を伸ばして取り、これで千人を打ち殺した。

ここを読んで新聖歌３８０番を思い出し、再び賛美を。

人に捨てられて　塵の中に　埋もれてありし　ろばの骨も
主に見出されて　引き上げられ　力ある御手の　中にぞある
ろばのあぎと骨（あご骨）そはわがこと　ろばのあぎと骨　そはわがこと
主よ手に握りて　用い給え　悪魔に勝利を　得る時まで

そうなのか、ろばのあご骨のように捨てられた役に立たないものも、主の霊に満たされたサムソンの手にかかれば、どれほど豊かに用いられることか。

骨には戦う　力あらず　力は用いる　主にのみあり
見よ主の手にある　あぎと骨に　倒さるる敵の　数多きを

と歌いながら、ほんとうに取るに足りない私たちも主がお用いくださるなら、悪魔に勝つことだってできるのだと知って、自分の無力を嘆くまい。愚かさゆえに諦めまいと3人で励ましあった。

「ヨハネの黙示録」は私たちにはとても歯が立つまいと思いつつ、それでも「求めよ、さらば与えられん」との御言葉に励まされて 1 章を輪読。その後、榎本保郎「一日一章」を読んだ。いつも教えられることの多い本であるが、黙示録1章は特によく分かった。

「黙示録は再臨の主と新しい天と地とを待ち望みつつ書かれたものである。それは必ずやってくるものであって、架空のものではないという信仰は、キリスト教信者の冒険というか、それを信じているから、キリスト教信仰がある。だから、今の世界をなんとかよくしていこうということを、キリスト教信仰の目的のように言いだすと、それはキリスト教信仰、聖書の信仰からそれてくると思う。今の世界は不完全な世界であり、完全な世界は神によって来るものである。だから私たちは神が来られるように祈り、信仰生活をしなければならぬ。『マラナタ(われらの主よ、きたりませ)』『主よ御国を来たらせたまえ。』神様、早くあなたが支配する世界をきたらせてください・・・・・」

他にも、「わたしはアルファであり、オメガである」との御言葉の恵みも、深く教えられ、ご自身を求める者を決して空手で帰されることのない主の真実に感謝を捧げた。

****

イエス様を信じると何か良いことがしたくなる。誰に言われなくても、神様のため人のために何かできることはないかと、少し焦ったりする。でも、どんな良いことをしようとしても、それをするのは所詮この自分である。忍耐強くもなく、情け深くもなく、その上に理性的でもない。どんな美しい動機で始めようと、美しくあり続けられるはずがない。どんな愛に満ちた思いも、いつまで続くはずがない。もし、良いことをするのがキリスト教信仰の証だとしたら、クリスチャン失格は言うまでもない。でも、クリスチャンの目的は、良いことをすることではない。良いことのできない情けない者をも捨てないで、「われに従え」と言ってくださるイエス様についてゆくことである。どこまでも、何があってもイエス様が罪を贖ってくださったと信じ、「愛しなさい」との戒めを守ろうと務めることである。主よ、何があっても投げ出さない、あなたの愛を与えてください。